

## 二 信仰しんこうのふるさと書写山しよしゃざん

### (一) 性空上人しやうくうしやうにんと書写山

性空上人 姫路城の北西、夢前川ゆめさきがわ沿いにある書写山には、千年余りも前から、多くの人々が信仰おとすして訪れた圓教寺えんぎやうじがあります。この寺は、貴族きぞく橘善根たちばなよしもとの二男である性空上人によって開かれたものです。

性空上人は、九一〇年（延喜えんぎ一〇年）に、京都で生まれました。小さいころから、もの静かな性質で、生き物を殺すようなむごいことをきらい、僧そうになりたいと考えていました。九才のとき、法華經ほうけきやう八卷かん全部を習い、一日も休まず読んだとのことで、これを聞いた人々は、たいへん驚おどろきました。けれども、貴族の子だったので、僧になりたいという希望は、両親おとつらにきいてもらえませんでした。



大講堂（お経の勉強や議論をしたところで  
圓教寺で最も重要な建物です）

た。

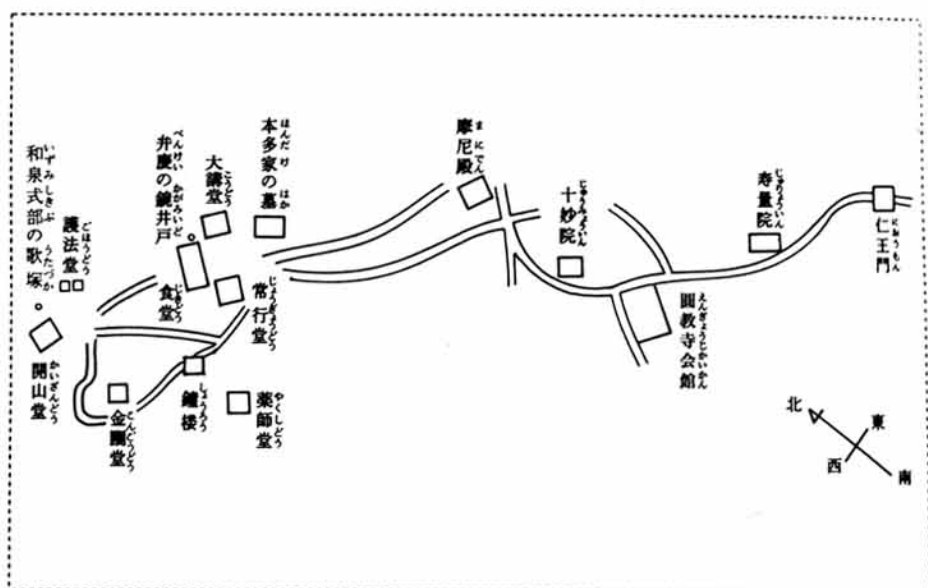
ある日、上人の母は、夢の中  
で、文珠菩薩という仏から  
「あなたの子を早く僧にしな  
さい。」というお告げを受けた  
ので、ようやく出家を許しま  
した。

三十五才になっていた上人  
は、九州の霧島山にこもり、  
修行を重ねました。それから、  
修行の霊地を求めて東へ向か  
いしましたが、常に紫雲に導か

れ、それのどどまった書写山を清らかな山として、ここに、いおりをつくった  
ということでした。これが圓教寺の始まりで、九六六年（康保三年）、上人が五  
十六才のときでした。上人は、貧しい人に物を与えたり、仏の教えを説き聞か  
せたり、あるいは、たよってくる僧にお経を説き明かしたりしていました。

やがて、その高い徳は、いつのまにか広く世間に知れわたり、天皇をはじめ  
多くの人たちが、訪ねて来るようになりました。花山法皇は、二度も上人を訪  
ね、大講堂を建てたり、絵師に上人の姿を描かせたりしました。上人は、九十  
七才でなくなりましたが、圓教寺は、その後もますます栄えました。

上人にまつわる伝説には、生まれたときに、左手に針を持っていたとか、修  
行をしているとき食物がなくなると、お経の本の中から米つぶがわき出たなど  
の話があります。これらの伝説が生まれたということは、上人が、それだけ多  
くの人々から尊敬されたりっぱな僧であったからだといえましょう。



圓教寺の配置図

## 圓教寺 性空上人が書写山を開

いたあと、本堂（摩尼殿）・大講堂・常行堂・食堂など、多くの建物が次々に建てられました。最も栄えた鎌倉時代の終わりから南北朝時代にかけては、三十余りの寺院があつたといわれています。寺の領地も六十三ヘクタール、山上で学ぶ僧が千人余りもいて、西の比叡山と呼ばれました。

圓教寺がこのように栄えたのは、これまでの仏僧が政治に口出しし、

乱れていたのに対して、都から離れた山中で、厳しい修行を積みながら、人々を救おうとしたからだといえます。このことが朝廷に認められ、また、貴族の保護を受け、人々の間にもしだいに信仰が広まりました。そして、武士の時代になっても、武士の間で信仰され、平清盛がお経を納めたり、源頼朝が戦勝を祈ったりしました。また、豊臣秀吉も寺に領地を寄付しました。江戸時代には、姫路城の代々の城主が手厚い保護を続けました。それで、今も境内に、姫路城主の本多・榊原・松平の諸家の幕があるのです。また、庶民には、西国第二十七番の札所として親しまれています。

このように、圓教寺は、千年余りの風雪にたえて、むかしのおもかげを今日に伝え、人々の心を引きつけています。ただ、残念なことは、平安時代の建物が、落雷や火災で焼けてしまったことです。現在残っている古い建物は室町時代以後のものですが、多くの建物が、国の重要文化財に指定されています。ま

た、仏像の中にも、重要文化財に指定されているものが多くあります。

### 女人禁制にょにんきんせい

書写山は、けがれを払って、心身ともに清めるための霊地として性空上人によって、女人の登山を禁止し、とくに僧の修行の道場として開かれたと言われますが、それが崩れていたので、善法寺慈伝ぜんぽうじじでん（心空しんくう）和尚おしょうが一三九八年（応永五年）に女人禁制にしました。そして明治維新廃令まで如意輪寺にょいりんじ本堂を女人堂として、女の人の巡礼は、ここにお札を納めて帰ったわけで、今も苔むした墓標や石仏に往時おうじがしのばれます。女人堂のある東坂は、書写山の南麓なんろくに広がり、圓教寺の参道で東坂登り口としてにぎわった門前町でした。今は、ロープウェイが設置されているので、立ち寄る人も少なくなっています。

女人登山を停止した慈伝は、妻鹿の人で十二歳の時書写に登り、十四歳で出家し、熱心に学問をした人です。『圓教寺記』という書物には、慈伝のことを「性空の再来」と記しるし、高く評価されています。



和泉式部の歌塚

和泉式部の歌塚

書写山には、和泉式部についての名高い伝説があります。

藤原道長の娘で、一条天皇のお后になった上東門院が、七人の女官と百人のお供を連れて性空上人を訪ね、教えを受けようと思いました。上人は、山にもって修行をしているところへ女性が訪ねて来ることは、修行の妨げになると

考えていたので、その日の朝、法力というすぐれた力で、このことを感じとると、おつきの僧に、「今日、七ひきの鬼が来るだろう。もし、わたしを訪ねて来ても、

九州へ修行に行つたと伝えてくれ。」といって仏堂にこもり、会おうとしませんでした。

はるばる都から訪ねて来たのに、会えないということ、お后は、たいへん失望しました。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき

はるかに照らせ山の端はの月

この歌は、女官の一人であつた和泉式部が、上人を月にたとえ、暗い迷いの道を明るい月の光が照らすように、おろかなわたしたちを救つてほしいと上人におくつた歌です。上人は、仏の道のことを多少こころえているこの歌に感心し、山門を出て下山しかけていた一行を呼びもどし、法華経の一部をねんごろに説いたということです。



開山堂かいざんどうの北に、和泉式部の歌塚かづかといい伝えられている石塔せきとうがあります。これは、そのころの人々が、和泉式部の和歌に感動したので、このようないい伝えができたと思われます。

また、食堂の北側に、弁慶べんけいの鏡井戸かがみいどというのがあります。これは、いたずら者で始末におえない弁慶を、こらしめてやろうとした仲間なかまの僧そうが、昼寝ひるねをしている弁慶の顔に、すみでいたずら書きをしました。おおぜいの僧たちが大声で笑わらったので、目をさました弁慶が、この井戸に顔を映うつして、そのいたずらを知ったといわれています。